

[学術資料]

2014年1月11日 名古屋市立大学大学院人間文化研究科「社会と協働」分野・
公開セミナー

防災・減災とコミュニティ、地域住民組織

——拙著『「原発さまの町」からの脱却』に即して——

講師 吉原直樹氏（大妻女子大学教授）

Open seminar hosted by “Society and Collaboration Seminar Group” at the NCU Graduate
School of Humanities and Social Sciences

Title: Disaster prevention and disaster reduction, a community, a local resident organization

Speaker: Naoki Yoshihara

山 本 芳 幹

Yoshimiki YAMAMOTO

Studies in Humanities and Cultures

No. 21

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 21号
2014年7月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN

JULY 2014

[学術資料]

2014年1月11日 名古屋市立大学大学院人間文化研究科「社会と協働」分野・公開セミナー

防災・減災とコミュニティ、地域住民組織

——拙著『「原発さまの町」からの脱却』に即して——

講師 吉原直樹氏（大妻女子大学教授）

Open seminar hosted by “Society and Collaboration Seminar Group” at the NCU Graduate School of Humanities and Social Sciences

Title: Disaster prevention and disaster reduction, a community, a local resident organization

Speaker: Naoki Yoshihara

山本芳幹*

Yoshimiki Yamamoto

要旨 2014年1月11日に、大妻女子大学教授・吉原直樹氏を講師に迎えて開催された、「名古屋市立大学大学院人間文化研究科『社会と協働』分野・公開セミナー」の内容報告である。「防災・減災とコミュニティ、地域住民組織」をテーマとして、福島第一原発被災地域住民を対象としたフィールドワークをもとにした「創発するコミュニティ」形成への課題や展望をテーマとし、講演および質疑・応答が行われた。

キーワード：「原発さまの町」、コミュニティ、場所、創発性

昨年からはまった「名古屋市立大学大学院人間文化研究科『社会と協働』分野・公開セミナー」が、2014年1月11日に本学滝子キャンパスで開催された。第4回となる今回は吉原直樹氏（大妻女子大学教授）を講師に迎え、「防災・減災とコミュニティ、地域住民組織～拙著『「原発さまの町」からの脱却』に即して」をテーマとして、本学教員、大学院生、学部学生のほか、外部からの参加者も加えて行われた。吉原氏から、東日本大震災後に進んだメディアを含めた「震

* 名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士前期課程

災復興」をめぐる動きから見えてきたこの国の政治状況や、コミュニティのあり方についての、実証的な調査データも含めた説得力あふれる講義が行われた後、フロアとの活発な意見交換がされた。

■「原発さまの町」の構造

吉原氏の講義は、2013年11月に上梓された吉原氏の著書である『「原発さまの町」からの脱却』の内容に沿って行われた。同書で採り上げられている福島県双葉郡大熊町は、同郡双葉町とともに福島第一原発が立地する自治体である。全町民の96%が帰宅困難地域に住居を構え、町民のほとんどの人たちが現在に至ってもなお「最低限の生きる権利さえ満足に保障されない」難民としての生活を余儀なくされている。驚くことに、そうした厳しい状況下に置かれている被災者との会話にはしばしば「原発さま」という言葉が出てくるという。原発立地以前の大熊町は太平洋に面しながらも良港はなく、農業以外のこれといった産業もない「県下で1、2を争う後進の町」として「福島県のチベット」と呼ばれるような町であった。それが、所得が増え、働く場所が得られるようになったのは原発を選んだがゆえであった。そのため大熊町は、「原発に依存し、原発による受益体制に組み込まれ」、「原発のリスクが見えにくくなっている」なかで、「原発さま」という意識が多く町の間に広がっていった。

その基層には、例えば哲学者・高橋哲哉が「犠牲のシステム」と呼んだ、経済成長など共同体全体の利益が誰かの犠牲の上に成り立っている構造があり、それを地域の側から支えてしまってきたことを吉原氏は指摘した。さらに吉原氏は、原発事故後もその構造がまったく変わっていないことを強調する。あれだけの事故が起き、未だ終息への見通しも見えない状況にあっても、大熊町からの避難民の間では東京電力に対してははっきりともの言えないような状況が続いており、「原発さまの町」の原構造は今もしっかり生き続けているという事実、あらためて「フクシマ」問題の持つ深刻さ、難しさについて認識させられた。

■「あるけど、ない」コミュニティ

次に吉原氏は、「原発さまの町」のコミュニティとしての有り様について説明した。避難所、仮設住宅で被災者に対する聞き取り調査から浮かび上がってきたのは、突如襲ってきた災害・事故に対し、町内会などの地域自治組織がまったく役に立たなかったということである。被災直後の早い段階で被災者は難民化し、避難を余儀なくされる状況にあっても行政区や班といった地域コミュニティからの連絡や誘導はなかった。大熊町では1981年から、福島県と相双地区6町の共催で大がかりな原子力防災訓練が実施されてきた。訓練自体は常に、国→県のイニシアティブの下に、細かなマニュアルに沿ったシナリオ通りに行われ、そのたびに多くの住民が動員された。そうした大がかりな訓練が、実際に事故が起きた際にまったくと言ってよいほど、役に立たなか

ったということに驚かされる。多くの人たちは、避難の際に近隣住民とか同じ町内の人々を振り返ることなく、家族や親戚と連れだって車で避難したという。釜石市などで行われた別の調査でも、町内会や自治会からの情報によって避難行動を得たという人の割合は低かったとされる。

そうした調査結果を通して吉原氏は、現在のコミュニティが「あるけど、ない」状況になっていることを強調する。地域のコミュニティが実際にこうした状況に陥っていった原因として、吉原氏は次の四つを挙げる。一つ目は、原発によってもたらされる便益と受苦を余儀なくされる体制が貫徹していたこと、二つ目はそうした便益体制の下で生活の「私化」が広がり、集落意識が衰微していったこと、三つ目はコミュニティ全体が「安全神話」の下に組み込まれてきたこと、そして東京電力の地域社会対策が徹底して行われてきたことだ。「3.11後に起きた状況を正しく理解していくためには、3.11前に起きていたことをしっかりと見つめることが大切だ」という吉原氏の言葉は、こうした調査結果からとても説得力をもって受け止めることができる。

■ 「国策自治会」と「もうひとつの自治会」

講義はさらに、現在の日本における「自治会」という存在が持つ問題へと進んでいった。

東日本大震災後、メディア等では「コミュニティが大事だ」という言説があふれかえった。そして、震災に関連して、宗教学者や民俗学者などによる「祈り」や「フォークロア」といった言葉が論壇を席卷するなど、「コミュニティ・インフレーション」と呼べるような状況が現出していると、吉原氏は指摘した。そして、そうしたコミュニティアニズムが他方でネオリベリズムとの親和性を持つようになってきているとする。ネオリベリズムは既存の社会をグローバルな市場へと解体していく一方で、自らのヘゲモニーを確保するためのエージェントを必要とする。そのためエージェントたるにふさわしい個人を選別しリクルートする装置としての「学校」とともに、個人に対して道徳的な責務を課す文化的で倫理的なコミュニティが求められるようになり、その推進を担う有益な政策主体としての国家が期待されるようになる。こうした回路を経て、統合的な社会を求めるコミュニティアニズムが、その一方で一見正反対の性質を持つとされるネオリベリズムと奇妙な親和性を持つようになる。こうした吉原氏の論は、イギリスにおいて道徳的なコミュニティ形成が新しい（進化した）ネオリベリズムと結びついているとする社会学者のニコラス・ローズによる「アドバンスド・リベリズム」論などにも通じるものと思われる（Rose, 1999）。震災後の東北、そして日本を覆う現象は、日本での特殊なものとして立ち現れているわけではなく、グローバルなレベルで進行しているものであることに、あらためて気づかされた。

阪神淡路大震災以後、政府主導の自治会形成が全国的に推進された。その際には「元あるコミュニティをできるだけ復活させる」という名目で進められたが、実際にはあくまで「上からの押しつけ」として進められてきたことが調査資料で示された。震災後の仮設住宅で結成された自治

会も、あくまで「上から押しつけられた」ものであり、多くの住民が「自分たちの課題が行政に正確に伝えられていない」と感じているなど多くの問題を抱えるものであったという。その一方で吉原氏が注目するのが、こうした「国策自治会」とは異なる「もうひとつの自治会」が住民のあいだで自然発生的に生まれてきていることである。例えば、仮設住宅住民の中から生まれた「サロン」という場があり、外部のボランティアなども含めた、既存のコミュニティの枠に限定されない「異なる他者」が集まるなかで自治会を超える活動が展開されている。そこでは、それまでの「結束型」のコミュニティではない、人と人を新たにつなげようとする「架橋型」の組織が立ち上がっているのが見られるという。そうした新たな人のつながりが、「あるけど、ない」から「ないけど、ある」への反転につながるかもしれないという期待も語られた。

また、現状を変える大きな可能性のある存在として、大熊町の女性有志で結成された「大熊町の明日を考える女性の会」の活動について詳しい紹介がなされた。その特長として挙げられるのは、外部の人たちとも積極的につながり、あくまで「自分たちで判断する」ことを大切にすることである。その上で指示待ちでなく積極的に提案することを重視する。それは、国策自治会のような上から下への統治の末端に組み込まれるのではなく、横のゆるやかなつながりに基づくネットワーク型の組織であることが特徴である。さらには、活動の基軸を生活の私化から「生活の共同／協同」に移そうとしている点も特徴だとする。そうしたなかで、「原発さまの町」の原構造をあぶり出し、それを相対化しようとする動きを示していると、吉原氏は指摘する。

■創発するコミュニティの可能性

このように大熊町の現実を見ずえた上で、困難な現状を変えていく可能性として新たなコミュニティのあり方について話が進められた。

まず、課題とされたのは、「近隣」をどう捉えるかということである。物理的な近接性・隣接性に解消されない「新しい近隣」の考え方について、その可能性を語る。例えば、かつてジェイン・ジェイコブズが示したようなアソシエーションな概念としての「近隣」である。「女性の会」の活動などは、まさにこの「新しい近隣」として立ち現れているとする。ただ、現状では「女性の会」などオルタナティブ・コミュニティの活動が、その活動の性質ゆえのある種の「不安定さ」の中に置かれていることのあるさもある。それゆえの新しい人と人とのつながり、共同性を育てていくための道筋を見つけるため、現在取り組んでいるのが「創発性」という概念の追究だと吉原氏はいう。

「創発性」とは、吉原氏の著作から引けば「ヒト、モノ、コトの複合的なつながりから生じる、一方で開放性を、他方で異質性を兼ね備えた動的な関係を通底するもの」あるいは「方向が定まらないままにリズム状に立ち上がるネットワーク」であると説明される（吉原、2013）。こうした考えは、オギュスタン・ベルクが示した通態（*trajet*）にも通じるとし、環境を媒介として

諸個人間で多様なかたちでの横断や乗り越えを経て築き上げられる相互作用（関係性）に注目すべきとする。こうした考え方を、ラクラウとムフは「ラジカル・デモクラシー」という形でより積極的に位置づけ、ジョン・アーリは近接性と広範囲におよぶネットワークの接合からなる「オールタナティブ・コミュニティ」への視界を切り開いていくものとする。

一見して出口がないかのようにも見える現在のフクシマの状況乗り越えていくためには、従来型の政治・社会・経済などに通底する思考パラダイムそのものを見直し、新たな構築をめざす努力が必要になってくる。それを吉原氏は「創発するコミュニティ」をテーマとして、今後追究していきたいと語る。そのためには、現場に軸足を置き、現実の姿をしっかりと見つめる「実証」を大切にす姿勢と同時に、事実の背後にある見えない世界を可視化する理論の追究も大切になると考えられる。

■場所論を通してみる新たな政治への視点

今回のセミナーでは、時間的な制約もあり軽く触れられるだけに終わったが、吉原氏の一連の研究の中で大きなテーマとして挙げられるのが「場所」をめぐる論考である。

エドワード・ケーシーはその著書である『場所の運命』において、西洋哲学の長い伝統のなかで「場所」に対する認識は古代以来大切なものとして扱われてきたのが、時代が近代へと移り変わる過程で「場所」が「空間」に圧倒されていった、と指摘する（ケーシー、2008）。「場所」は、クロノメーターで測定される普遍的なものと見なされるようになり、さらには「あらゆる現象一般のア・プリオリな形式的条件と見なされた時間にも従属させられた」（同上、p10）。社会を語る上でのキータームとして、成長、進歩、進化、発展など、時間の流れのなかでの動きを表すものが大きな位置を占めてきたわけである。

ところが、1970年代を節目として「場所」にあらためて注目が集まるようになってきた。グローバル化やテクノロジーの進化がもたらす「グローバルな複雑性」（ジョン・アーリ）が進むなかで、社会生活をかつてのように国民国家のもとに囲い込まれたものとして捉えることが困難になってきている。こうした状況は、かつてディヴィッド・ハーヴェイが「時間-空間の圧縮」と呼んだ「われわれが自分たち自身に世界を表象する仕方をするときにはまったく根本的に変えざるをえないほど、空間と時間の客観的性質が根本的に変化する」状況をもたらしている。

そうした動きが世界的に進むなかで、「場所」をテーマとした論議は、もともとの出発点となった現象学や人文地理学、社会学といった領域を超えて、世界的には芸術や建築、科学、教育といった幅広い分野で巻き起こっていることは注目できよう。

ただ、こうした「場所論」の隆盛に対し、吉原氏はその動きがもたらすものの政治的な意味合いへの注意を喚起する。吉原氏によれば、ハーヴェイによる「時間-空間の圧縮」という論点は、「資本によって導かれた場所間競争の高まり＝場所性の強化」に照準をずえることにより、反ネ

オリベラルという立場を取っていながら「結果としてそうした論調を強力に担うものとなっている」という（吉原，2011）。その一方で吉原氏は、ドリーン・マッシーが「進歩的な場所感覚」と呼んだ、コミュニタリアン主導による「場所」をグローバル化に対向する「安定性」や「なんら問題のないアイデンティティの拠り所」として措定する論議の傾向も生まれてきているとする。そして、こうした二つの論議は、一方がネオリベラル的、他方がコミュニタリアン的なスタンスに立ち、一見対立しているように見えながらも「実際には奇妙なまでに交錯している」と指摘する。そうした状況は、先に述べた東日本大震災後のメディアの論調にもしっかりと表れている。

そうした状況に対し、ドリーン・マッシーは「権力幾何学」という考え方を提示する。空間内にあるさまざまな要素はすべて併置され、ともに投げ込まれているが、それは何も力・作用が働かない空間ではない。そこでは、ある特定の権力関係のもとで相互の節合から新しいものが生まれてくる。

新自由主義的グローバリゼーションの关系的な理解において、「場所」は、それら自身と「グローバルなもの」の両方を構成する、より広範なく権力-幾何学>における交差点だからだ。この観点からすると、ローカルな場所はたんにいつもグローバルなものの犠牲者であるわけではないし、グローバルなものに対抗してつねに政治的に防衛できる砦でもない。空間を権力の地勢（トポグラフィ）のつねに開かれた生産として理解することは、それぞれ異なった「場所」がグローバルなものとの対照関係において立ち上がるという事実を指し示す（マッシー，2014，p196）。

こうしたラディカルな関係性のもとで「場所」を捉えるという考え方に触れて想起されるのが、西田幾多郎の「場所論」である。小林敏明によれば、西田の「場所」概念は、「特定の静止した空間、ましてや地理的な場所を意味しているものではなく、「われわれに直接与えられる動的な状態そのもの」をいう。「そこには主観も客観も」なく、「ただ無限定の事態だけがある」とする（小林，2010）。西田は「デカルトのcogito ergo sumのsumは主語的存在の意味でなくして、述語的存在の意味でなければならない」とする。西田は「考える我」を「述語的存在」であると捉え、現在捉えられているような「主体」とは捉えない。そうした見方を小林は、「実体を認めないラディカルな関係主義だ」と指摘する。現在、われわれが「公共性」といった概念を考える際には、そこで社会的な認知された規範に従う主体化された「人間」を前提とするのに対し、西田の「場所」概念は、その逆を行くものといえる。

今日において「公共性」概念を検討する場合、こうした「主体」概念の検討にまで踏み込んだ議論が進められることが必要になってくるものと思われる。今回のセミナーにおいても、筆者からの質問に対し吉原氏は和辻哲郎との共同性との認識の違いを捉え、西田哲学の可能性について論じられていた。現在の隘路に陥っているとも思われる政治状況、社会への思考を前向きに進めていくためには、こうした主体概念の再検討も含めた真の意味での「ラディカル」な議論の展開

「社会と協働」分野・公開セミナー 防災・減災とコミュニティ、地域住民組織 講師 吉原直樹氏（山本）

がより必要になってくるであろう。

今回のセミナーを通して、大きな変化を続ける現代社会をいかに捉えるかの難しさを改めて感じると共に、見えないものを見えるようにする社会科学を追究する楽しさを改めて感じる事ができた。

<参考文献>

エドワード・ケーシー，2008『場所の運命-哲学における隠された歴史』新曜社

小林敏明，2010『<主体>のゆくえ-日本近代思想史への一視角』講談社

ドリーン・マッシー，2014『空間のために』月曜社

Rose, Nikolas. 1999, *Powers of Freedom: Reframing political thought*, Cambridge University Press.

吉原直樹，2011『コミュニティ・スタディーズ』作品社

吉原直樹，2013『「原発さまの町」からの脱却-大熊町から考えるコミュニティの未来』岩波書店